

一度きりの人生を後悔しないために、 全力で、時には勢いで、とにかくやってみよう！



田中 仁美

はじめに

私には3つの顔がある。1つ目は企業の研究員、2つ目は二児の母、そして3つ目は生物工学部門の技術士である。私の勤務先である日本たばこ産業株式会社では、たばこ製品のリスク低減に関する研究を行っている。入社してから現在13年目となる。仕事内容は若干変わるものの、基本的には細胞を用いた研究に携わっている。その間、2回の妊娠・出産を経験し、入社10年目で生物工学部門の技術士資格を取得した。正直なところ、研究者としても、母親としてもまだまだ半人前だと感じている。この13年間、自分が研究に向いているのか迷ったこともあったし、育児ノイローゼにもなった。技術士試験も1度落ち、資格取得を諦めかけたこともあった。決して順風満帆な13年間ではなかったが、現在2人の子供を育てながら、テレワークやフレックスタイム制など会社の制度を活用し、フルタイムで働き、技術士としての活動を行っている。とにかく前を見て、時には勢いにまかせて進み続けたからこそ、ここまでくることができたと思う。そんな自分のキャリアが少しでも参考になればと考え、筆を取らせていただいた。

細胞に魅了される大学院時代

京都大学大学院農学研究科では、細胞を用いた美味しさの研究を行っていた。もう少し詳しく説明すると“すごく美味しいと感じるけれど、カロリーの低い脂肪代替物質を見つけよう！”という研究をしていた。具体的には舌の味蕾細胞にある脂肪を“美味しい”と感じる受容体のある細胞にたくさん発現させて、通常の脂肪よりもカロリーが低い脂肪代替物質候補品（油脂会社と共同研究で開発）が、その受容体に結合する（＝“美味しい”と感じる）かを確認するという研究をしていた。細胞を用いたことは初めてで、顕微鏡で細胞を見た時の衝撃は今も覚えている。愛らしい楕円形で（細胞は種類によって形状が異なるが、私の使用していた細胞は楕円形だった）、日によって“顔”が違う。実験に失敗しても、“大

丈夫だよ、すぐにやり直せる”と言わんばかりにすぐに分裂増殖して μm レベルの小さな細胞達が、自分の知りたかったことを教えてくれる。そんな細胞達に魅了されて研究活動に没頭していた。

企業での研究

細胞への愛は冷めず、就職先は細胞を扱える会社を選んだ。結果、入社から現在まで、何かしら細胞に関係する仕事をさせていただいている。入社して最初の5年ほどは細胞を用いた毒性試験に携わり、新しい細胞毒性試験を立ち上げたり、複数の細胞種のたばこに対する反応性の違いを研究したりした。研究がうまく進まず、自分が研究者としてやっていけるのか悩んだり、迷ったりしたこともあったが、与えてもらった仕事をやり遂げられるように、とにかくがむしゃらに働いた。

幸運なことに国際学会で発表する機会もいただいた。しかし英語がまったく話せないことから、他国の研究者とコミュニケーションが取れず、とても残念な思いをした。悔しさをバネに、英語の勉強を始めた。

入社6年目にして仕事内容が現場での実験から、データ解析のみのデスクワークに変わった。現場から離れ、細胞に触れられない日々が続き、ひどく落ち込んだ。何かしら細胞とつながっていたく、細胞に関する勉強を始めた。闇雲に勉強をしても目標がないと続かないと思い、何かしらの資格を取ることを目標にしようと決めた。その時目標にした資格が技術士の資格であった。

技術士資格の取得

技術士試験は一次試験と二次試験の二段階から構成される。両試験とも受験チャンスは年1回しかない。幸い一次試験は一発合格したが、二次試験は落ちた。

技術士資格はただの資格ではない。技術士会では頻繁に自己研鑽の場として講演会などのContinuing Professional Development（継続研鑽、以下CPD）行事を行っている。CPD行事を通じて、技術士たちは定期的に交流し、人脈を大いに広げることができる。一次試験合格後、私は

興味本位でいくつかのCPD行事に参加してみた。そこで出会った技術士達はバイタリティ豊かで、非常に魅力的な方たちばかりだった。初めは細胞とつながり続けるための単なる勉強モチベーション維持のための技術士資格が、魅力的な技術士達と出会うことで自分も技術士になってみたいと思い、技術士資格取得が私の目標に変わった。

しかし、仕事が忙しくなり始め、そのような中で試験合格に向けて勉強をするのは容易なことではなかった。しかも妊娠し、試験開催月に臨月を迎え、翌年の2度目の受験は断念した。年1回の試験を受けるチャンスがなくなったことで、試験勉強をするモチベーションを維持するのも大変だった。その上、赤子の世話をしながらの試験勉強である。技術士資格取得を諦めかけたが、それまでに会った技術士達や技術士を目指す仲間の声援を受けて、子供が寝ている隙や、通勤時間を使ってなんとか勉強を続けた。勉強ができない理由や、また試験に落ちるかもしれないという不安などについては一切考えないようにして、少しでも空き時間があればとにかく勉強した。その甲斐あって、1度目の不合格から2年後に技術士二次試験に合格し、技術士になることができた。

技術士活動

技術士資格を取得後すぐに、日本技術士会の委員会の1つである青年技術士交流委員会（以下、青年委員会）の委員となった。青年委員会は、45歳以下のメンバーで構成されており、若手技術士向けを中心としたCPD行事の企画・実施を行う組織である。私が参加したCPD行事の中でもっとも面白いと感じた行事を開催していた委員会である。なぜもっとも面白い行事だと感じたのかというと、“アウトプット中心”の行事だったからである。青年技術士交流委員会とは、その名の通り“交

流”を主とする委員会である。多くのCPD行事は講師による技術紹介などの講演が主である一方、青年委員会の行事はグループワークを主とし、交流を通じて参加者が自ら問題点発見やアイデアの発想ができるアウトプットに重きを置いた構成であった。

グループワークの内容についても、特定の分野の技術に関するものではなく、すべての技術者にとって必要な考え方や、コミュニケーション能力、論理的思考力、リーダーシップなどが学べるようなものであった。技術のみを深く知っているだけでは技術士とは言えず、先にあげた総合力が必要となる。青年委員会の委員になり、CPD行事自体を提案、計画し、実行することは大いに総合力向上につながった。

また、青年委員会ではAssociation of South East Asian Nations（東南アジア諸国連合、以下ASEAN）の若手技術者との国際交流も盛んであり、ASEAN技術者国際会議に2回も参加することができた。その他にも、Webでの技術者のオンライン教育に関するパネルディスカッションにパネリストとして参加して、各国の技術者と意見交換を行ったりもした。これらの活動を機に、これまで進めていた英語の勉強も加速した。加えて、青年委員会は同年代の仲間を作るのに最高の場であった。青年委員会で出会ったメンバーは、志が高く前向きで積極的で、彼らと話すといつも“自分ももっと頑張らないと！”と思えた。一生付き合っていきたいと思えるようなメンバーばかりであった。

一方で、生物工学部会の幹事も務め、生物工学に関するCPD行事に参加することで専門知識も深めている。同じ専門分野でありながらも、世代や業種の異なる技術士達との何気ない会話の中で、新たな発見や気づきを得られることもたくさんあった。

“仕事”と“家庭”の二極対比に加えて、技術士会は仕



企画したCPD行事“技術者の英語力UP”



シンガポールでのASEAN技術者会議

事と家庭の両方につながっている第三の軸だと感じる。私にとって技術士活動は、多方面での自己研鑽の場であるとともに、あらゆる面において最高のモチベーション向上の場である。

妊娠・出産・子育て

1人目の子供については深く考えずに授かった。これまで私の周りには子供はまったくおらず、子供がどのようなものかも分からないまま子育てを始めた。私の子供はよく泣き、なぜ泣くのか私にはまったく分からなかった。夫は海外出張で不在がちで、両親は遠方に住んでおり、頼れる人がいない中、多くの時間を子供と二人きりで過ごした。子供は毎日夕方に1時間ほど泣き続けた。

抱っこしても、あやしても、ミルクをあげても、何をしても泣き続ける。いつしか夕方になるのが怖くなり、泣いている子供の横で布団をかぶり縮こまることもあった。とても情けないことである。育児ノイローゼになり、片方の耳が聞こえなくなった。職場復帰するために保育園に入れようとするも保育園確保は激戦だった。15園応募して、なんとか1園だけ決まった。子供を保育園に預け、職場復帰して子供以外のことを考える時間ができたせいも耳も聞こえるようになったが、新たな試練が訪れた。保育園は家から徒歩20分弱、職場は家から片道1時間半、子供の迎えは18時、夫の帰りは毎日深夜。それでも出産前と変わらずフルタイムで働きたく、フレックスタイム制を活用し、夫に子供の送りをまかせて、私は毎朝4時に起きて5時に家を出て、7時から16時までの勤務を3年以上続けた。

このような状態で2人目を授かるなんて到底無理、と1年ほど悩んでいたが、ある時“なるようになるか”と勢いで2人目を授かった。現在1人目の子は5歳、2人目の子はもうすぐ1歳になる。二人育児は思ったよりも大変ではなかった。いや、大変は大変なのだが、足し算

の大変さではなかったという方が正確だろうか。私自身ある程度子育てに慣れており、かつ、上の子が下の子の面倒を見てくれたのだ。“人生、時には勢いも大事”だということ学んだ。

おわりに

二児の母として家庭を切り盛りしながら、平日はフルタイムで企業人として働き、休日は技術士として青年技術士交流委員会副委員長、生物工学部門の幹事として活動している。毎日一息つく時間はほとんどないが、時間がないからこそ何事も集中して一気に片付けられる。むしろ時間がない方が、効率的に時間を捻出し、物事に取り組めるように感じる。そのような培われた瞬発力はあらゆる場面において、自分の強みとなった。

人生は一度きりで、持ちうる時間は限られている。そのような中で一瞬一瞬を大切に、”明日は無い”という気持ちで、全力で今を楽しみながら生きる。どのような仕事も命を取られるわけではないし、子供は最低条件として死ななければいい。マストとベターを明確にして、次々と優先順位をつけて進めていく。どんなことがあっても諦めずに、時には勢いで、とにかくやってみる。これが、私がこれまでのキャリアの中で常に念頭に置いていたことである。

今はまだ子供たちは小さく手がかかるが、子供が大きくなるにつれて、自分のキャリアも変わっていくと思う。

また、コロナ禍に伴い、働き方もさらに多様化しつつある。

これから10年後、20年後の自分の未来は、今の自分から確実につながっている。だからこそ自分の明るい未来のために、後悔することなく、これからも母であり、企業人であり、技術士でありながら、家庭も仕事も自分も犠牲にしないで走り続けていきたい。

<略歴> 2008年 京都大学大学院農学研究科食品生物化学専攻修士課程修了、同年 日本たばこ産業株式会社入社、製品評価センター研究員、2017年 技術士(生物工学部門)取得

<趣味> 筋トレ